

ジヨナサン・エドワーズとカルヴィニズムの逆説

(一)

イギリスにカルヴィニズムが浸透し定着する十六世紀中葉は、シェイクスピアを頂點となすエリザベス朝悲劇群が盛んに書かれるやうになる直前の時期でもあつたのであり、カルヴィニズムの苛烈な宿命觀とシェイクスピア悲劇との間には頗る密接な關係が存在してゐると、野島秀勝は『近代文學の虚實』に書いてゐる。「カルヴィニズムといふ宗教上の革命がなかつたならば、エリザベス朝の大悲劇群はつひに誕生することがなかつた」であらうと野島は云ふが、既述べたやうに、人間を超える存在以外に信仰の對象を認めないカルヴィニズムは、人間に對する頗る嚴しい認識を有してをり、シェイクスピアもまた、さういふ嚴しい人間觀の傳統が生み出した作家なのである。それゆゑ、メルヴィルはシェイクスピアに傾倒し、『アントニーとクレオパトラ』に出るエノバーバスとか、『リア王』に出る道化とかいふ、人間性に關する眞實を包み隠さずに語る登場人物に取り分け強い關心

を示したが、それは詰り、メルヴィルにとつてシエキクスピアが、比類なき「偉大な眞實の語り手」だつたからに他ならない。實際、シエキクスピアの作品には、隨處に赤裸々な人間に關する眞實が語られてゐる。例へば、リア王はかう云ふ。

やい、田舎役人め、酷い奴だ、手を控へろ！ なせその淫賣に鞭を當てるのだ？ それより己れの背を鞭打て、貴様の慾情はその女の肉を求めてゐる、その疼きが女を鞭打たせるのだ。(福田恆存譯)

淫賣婦の肉體に魅せられながら、否、魅せられるがゆゑに、田舎役人が嚴しく鞭を振ふ。同様に、非行少女を補導する警官や教師が、少女の肉體に魅せられ、魅せられるがゆゑに、その非行を難ずる。さういふ事が確かにある。詰り、他者を裁く時、我々は必ず、己れの惡を棚上げしてをり、それがいつの世にも變らぬ人間のありの儘の姿である。それゆゑ、エドワーズは「自分の心を信用する奴は阿呆だ」と云つた。屢々己が心中に惡魔を見てゐたからである。

エドワーズの備忘にさういふ人間の「心」のありの儘の姿が描かれてゐる件りがある。エドワーズは云ふ。教師や聖職者には、習慣として或る種の惡を憎んでゐながら、内心、それを烈しく求めてゐる者もあるが、彼等はただ習慣に縛られて、或は社會的制裁を恐れ

て、悪事を犯さずにゐるに過ぎない。だが、「不道な行為に耽る他人を羨み、職業柄、自らはその悖が樂しめないものだから、羨望ゆゑに烈しく反撥する。しかも、さうして他人の悖を難ずる己が熱意を正義感の發露だと思ひ込むのである」。

肉慾の「疼きが女を鞭打たせる」とシエイクスピアは書いたが、エドワーズもまた、羨望の假面を被つた悖の樂しみといふ人間心理の絡繰りをはつきりと見抜いてゐる。エドワーズは謹嚴なピューリタンだつたから、生涯、芝居を觀た事もなく、シエイクスピアを讀んだ事もなかつたらうが、シエイクスピアといふ劇作家もエドワーズといふ宗教家も、人間に關する樂天的な信仰を峻拒する嚴しいリアリズムゆゑに、時代や國籍を超える人間に關する普遍的眞實を語つたのである。ランダル・ステュアートは『アメリカ文學とキリスト教』に、カルヴィニズムの人間觀は「如何なる時代の人間の條件にも關聯性」を持つてをり、時代が變つても常に「再發見される」ものなのだから、十八世紀に於てであれ、二十世紀に於てであれ、「時代錯誤」の誹りを受ける謂れは決してないと主張してゐる。カルヴィニストの呈示する「人間の條件に關する疑問」について、ステュアートはかう書いてゐる。

決定的な疑問は人間の本性に關するものである。詰り、人間は生來善と、それとも惡と

見なされる存在なのか。(中略) 教育を通じて無限に完成され得る存在なのか、それとも根本的に不完全であつて、とどの詰り、人間的な、餘りに人間的でしかない存在なのか。自らの理性のみによつて自らを救済し得る理性的存在なのか、それとも、理性は有用かつ必要なものではあるが、やはり理性の掲げる最高度の要求を満たし得ない不十分な存在でしかないのか。

これこそは歐米に於て今も昔も常に問はれる「決定的な疑問」なのであり、ライオネル・トリリングの云ふやうに、かういふ疑問をめぐる「論争」こそが、即ち、二元論のデアアレクテイークこそが、歐米文化の本來の在り様である。云ふまでもなく、カルヴェイズムはこの「論争」に於て、人間に關する樂觀論を徹底的に斥けた。カルヴェイズムの信念に従へば、「生來悪と見なされる存在」でしかない人間は、教育によつても、理性の力によつても、つひに救済されない憐れむべき存在であり、さればこそ絶対平和の如き「理性の掲げる最高度の要求」を、人間は何時になつても満たす事が出来ない。最晩年の著作『原罪論』にエドワーズは書いてゐる。

人間は頑なに悪を指向する存在である。ノアの洪水以前であれ、以後であれ、モーゼの律法の下に於てであれ、イエス・キリストの福音の下に於てであれ、舊約の時代のユダヤ

人であれ、非ユダヤ人であれ。その後の時代のキリスト教徒であれ、ユダヤ教徒であれ、イスラム教徒であれ。カソリックであれ、プロテスタントであれ。文化、教養、藝術、學問の普及した文明國の國民であれ、アフリカのホットントットやアジアのタタール人やアメリカのインディアンであれ。(中略) 都會に於てであれ、僻村に於てであれ。宮廷に於てであれ、あばら屋やインディアンの特ト小屋や地下の獨房に於てであれ、惡を指向するといふ人間性に何の違ひもありはしない。

これを要するに、時代、國籍、人種、宗派、教養、貧富、それらの相違に一切かかはりなく、人間が人間である限りは、「頑なに惡を指向する存在」として普遍的性格を持つとエドワーズは云ひ切る。さういふリアリズムが我々の文化には決定的に缺けてゐる。それゆゑ、例へば一九七九年、中國軍がヴェトナムに攻め込んで中越戦争が勃發した時、朝日新聞は社説にかう書いた。

カンボジアから始まつた一聯の戦闘を通じて、われわれは國際紛争がいまなほ武力と流血によつてしか解決されぬ現實を、あらためて見せつけられた。しかも、それが「民族解放と平和」の旗を高くかかげる社會主義陣營の内部でつづけざまに起こつたことにふかい幻滅を感じてゐる。

詰り、平和勢力の社會主義國同士が武力衝突を起こす事などあり得ないと思ひ込んでゐたから、朝日はインドシナ半島の「現實」に動轉し、「ふかい幻滅」とやらを覺えざるを得なかつた譯だが、社會主義を奉じようが奉じようまいが、人間はカインとアベルの昔から、時に暴力を用ゐても憎い敵を打ち負かしたいと思ふものなのである。そして、エドワーズの信じたやうに、さういふ宿命的本性の桎梏から自らを解き放つ力など、いつの世にも人間は持ち合はせてゐない。

だが、吾國に於てリアリズムを缺いてゐるのは進歩派ジャーナリズムだけではない。産經新聞によれば、先般、米國議會調査局は「日本の外交體制」と題する報告書を作成し、「經濟のみに專念し、安全保障面への配慮が極端に缺けてゐる」吾國の現況を分析し、日本には「對外政策に關聯して、外國での軍事、戰略に關する情報を収集する能力」が殆ど無く、危機と云へば「國內の天災のみを想定する」のが國民の大部分だと指摘してゐるといふ。これを要するに、リアリズムの缺如は朝野を問はないといふ事であり、さういふ極樂蜻蛉の金満國家を覺醒させるには、一世紀半前の船來航に匹敵する、強烈な「外壓」を期待するしかないのかもしれない。

一七五〇年、夏、エドワーズは二十三年間務めたノーサンプトン教會の牧師の職を、教會員の投票によつて解任される。當時、四十六歳だつたエドワーズは、妻と十一人の子供を抱へ、途方に暮れる事となるが、エドワーズが解任されたのも、とどの詰りは、「巡禮始祖」と同様の熱烈な信仰の復活を願ふ、いかにもエドワーズらしい激しい理想主義に起因する。エドワーズは持ち前の嚴しい正義感および牧師としての強い責任感ゆゑに、教會員との間に軋轢を起す事が少くなかつたが、母方の祖父にして前任の牧師たるソロモン・ストダードの確立した教會制度を公然と批判した時、教會員との對立は決定的なものとなつたのである。

ソロモン・ストダードは十八世紀初頭の高名な宗教指導者だが、十七世紀末葉から顯著になり始めた世俗主義的傾向に對應すべく、彼は教會員となる者の條件を大幅に緩和し、その教區に於ては宗教的回心の告白をしなくても、とかくの風評のある者でない限り、希望者は誰でも教會員になれる事になつた。その結果、ノーサンプトンはボストンに匹敵する大きな教區となり、ストダードは「法皇」と呼ばれるほどの強い影響力を持つに至つた。

そのストダードが、亡くなる三年前、自らの後継者として教會員に推薦したのが、當時二十三歳の孫、ジョン・エドワーズであり、衆望を擔つてノーサンプトンにやつて來たそのエドワーズが、次第にストダードのやり方への疑念を強め、牧師になつて二十三年後の一七四九年、「完全陪餐の資格に關する考察」と題する文章を發表し、ストダードの改革を公然とかつ強硬に批判したのである。

批判の眼目は、教會員たるための條件にかかはるものであつた。エドワーズは、教會員たるためには、初期ピューリタンの場合と同様、宗教的回心の告白が不可缺の條件だと主張した。宗教的回心を體驗してこそ、キリスト教徒として生きる事の眞の意義に目覺め得るのであり、教會はさういふ眞の信仰者の共同體であらねばならない。ストダードの推進した入會條件の大幅な緩和は、時流への許し難い妥協であり、信仰の衰退を容認する事もしくはそれを助長する事にしかならない。

「完全なキリスト教徒」たる事を生涯の理想とした、如何にもエドワーズらしい主張だが、私にとつて何よりも興味深いのは、エドワーズが己が信念を貫くべく、死後二十三年経つてなほ教會員に敬慕されてゐた祖父を、しかも自らも敬愛してゐた祖父を敢へて批判したと云ふ事實である。一七四六年、祖父の批判に踏み切る三年前、エドワーズは『宗教

的感情』と題する著書に、「キリストの眞の弟子たる者は、父母よりも、妻子よりも、兄弟姉妹よりも」、いやいや、「己れの生命よりもキリストを愛さねばならない」と書いてゐる。その言に違はず、エドワーズは骨肉の情愛より「キリストの眞の弟子」たる事の方を選んだ譯だが、無論、それは容易な事ではなかつた。「完全陪餐の資格に關する考察」の「序文」にエドワーズは書いてゐる。

私も以前は祖父と同じ考へを持つてゐた。祖父の書物を通じて、既に子供の頃から、さういふ考へを持つた。無論、牧師としての職務も、祖父のやり方に倣つた。(中略)かくも尊敬された祖父の權威、論證の力、牧師としての成功、高い名聲や影響力に対する畏敬の念を、私は長い間持ち續けた。しかし、神性についての研究を重ね、經驗を積むにつれて、祖父のやり方に疑惑を抱くやうになり、それゆゑの煩悶や不安が次第に強くなつたのである。

そしてエドワーズは、「煩悶や不安」を除かうと長く苦しい考察を續けた結果、つひに祖父のやり方の非なる事を確信し、もはやそれを容認する譯には行かぬと決心し、祖父を批判する文章を公けにする事にした次第について、續けてかう書いてゐる。

この文章を公けにするのは何とも重苦しい氣持である。何といつても、遍く尊敬された

祖父が説教壇と印刷所からかくも熱心に主張した考へ方に異を唱へるのだ。これまで私が果して来た公けの仕事の中で、今回くらゐ、氣の進まなかつた仕事もない。けれども、世界の大きいなる統治者の至上の摂理に導かれ、これをやり遂げる事が是非とも必要であり、絶対に避けられない事だと確信するに至つたのである。

だが、教會員の多くはエドワーズの苦衷を理解せず、激しく反發した。何しろ、ストダード以來の數十年に及ぶ教會制度を、人もあらうに、その實の孫にして繼承者の筈のエドワーズが根本的に否定したのだ。反發は覺悟してゐたエドワーズは舊友にかう書き送つてゐる。

今の地位を追はれる事にでもなつたら、私は實に情けない境遇に陥る事になるでせう。今の世のために有用な仕事が出来るとも、生計のために何か違つた性質の仕事に就く事が出来るとも思へません。生來、世俗の仕事には甚だ不向きな質ですし、かくも長い間牧師として働いて来たのですから、今となつてはどう仕様もありません。(中略)しかも、方々に澤山の敵がゐて、私の激しい主張や、熱意や、嚴しい措置を憎み、私を打ちのめさうと狙つてゐます。(中略)私は今、絶壁から飛び降りようとしてもしてゐるかのやうな心境です。けれども、私が常に最大の注意を払つて觀察してゐる、神の御心と御旨の明確な

證據と、義務の道との他には、あらゆる事柄に完全に目を閉ぢ、云はば日隠しをしたまま突き進むしかありません。

氣を許した友人に宛てた書簡のせみか、些か情緒的な文面だが、「絶壁から飛び降りようとしてもしてゐるかのやうな心境」だといふ言葉に偽りはなかつたであらう。妻と大勢の子供を抱へて路頭に迷ふ事への危惧は大きかつた筈だが、エドワーズは義務の道を突き進んだ。オーラ・ウインズローは『ジョンサン・エドワーズ傳』に書いてゐる。

これまでの二十三年間の遣り方が間違つてゐたと確信した以上、他に如何なる道があり得ようか、エドワーズはさう考へた。(中略) 事、原則の問題に關する限り、「便宜主義」などといふ言葉はエドワーズの語彙の中にはなかつたのである。

およそ「便宜主義」とは無縁だつたエドワーズは、「事、原則の問題に關する限り」、骨肉の情愛ゆゑに妥協する事はなかつた。宗教性とは「絶對的關心事に絶對的に關はる事」だとキルケゴールは云つてゐるが、エドワーズにとつても、宗教は「絶對的關心事」であつたし、信仰はそれに「絶對的に關はる事」以外の何物でもなかつた。詰り、「事、原則の問題に關する限り」、相對的な態度を執る事は斷じて許されず、あくまでも非妥協的たらざるを得ない、さうエドワーズは信じてゐた。『宗教的感情』にはかうある。

善にして榮光あるものの熱烈な友となる事は容易ではない。(中略) 同様に、悪の忌はしく有害な影響に立ち向ひ、その熱心な敵となる事も容易ではない。

だが、さういふ困難を自覺しつつも、エドワーズは善の「熱烈な友」、悪の「熱心な敵」たらんとした。祖父を強硬に批判する文章を公けにせざるを得なかつた所以だが、それは詰り、エドワーズの非妥協は、イエス・キリストの憎んだ「熱くも冷たくもない」生き方を斥ける、激しい信仰の情熱の發露であつたといふ事に他ならない。やはり『宗教的感情』にエドワーズは書いてゐる。

神が要求し、是認するであらう宗教は、我々をして無氣力状態から僅かに上昇せしむるだけの、薄弱で不活發で生氣のない慾求の中には存在しない。神は、眞摯に、熱心に、活發に、宗教と取り組めと仰つてゐる。「心を熱くし、主に仕へよ」と『ロマ書』にある。(中略) 宗教ほど、心中に活氣が必要とされるものはない。宗教ほど、微温的な生き方が憎悪されるものはない。

いづれも信仰に於ける情熱の大事を強調したから、エドワーズは屢々キルケゴールになぞらへられるが、キルケゴールは『現代の批判』(梶田啓三郎譯)に於て、十九世紀中葉の西歐社會を痛烈に批判して、現代は「善に引かれて偉業をなし遂げる者」も、「悪に

せかされて非道な罪を冒す者」も存在しない「情熱なき時代」であり、「ひとりの英雄も、ひとりの戀ひする人も、ひとりの思想家も、ひとりの信仰の騎士も、ひとりの高潔の士も、ひとりの絶望者も」もはや見出せないと嘆じてゐる。「心を熱くし、主に仕へよ」といふ『ロマ書』の言葉を胸に、神に對する「義務の道」を重んじるがゆゑに祖父をも斬つたエドワーズを、キルケゴールならば「ひとりの信仰の騎士」と呼んだかもしれない。

(三)

エドワーズは神を愛すべき無能な存在たらしめようとする時流には決して同調しなかつた。エドワーズの「怒れる神」は、時流を象徴するフランクリンの「愛すべき神」とは全く異り、人間の墮落を決して許さず、罪人を地獄の恐怖をもつて威嚇する恐るべき正義の神に他ならなかつた。説教集『罪とその果實』にエドワーズは云ふ、「神が地獄を必要とするのは、何よりもまづ、罪と罪人に對する自らの憎惡を永へに表明するためである」。

しかも、エドワーズによれば、激しく人間を「憎惡」する神をもキリスト教徒は心底か

ら愛さねばならない。地獄もまた神の創造したものであり、眞のキリスト教徒は神の創造の世界の秩序と美とに對してのみならず、地獄の存在を通して鮮明にされる神の正義の怒りの凄じさに對しても、等しく歡喜を覺えねばならないからである。「義ならざる人の破壊に關する義なる人の思ひ」と題する説教に於て、エドワーズは云ふ。

地獄で苦しむ汝を汝の兩親が見る事になるであらう。汝は恐怖と驚愕に身を震はせ、叫き聲をたて、齒を食ひしる。けれども、兩親は少しも憐憫の情を示さない。それどころか、神々しい歡喜の表情を浮かべ、歌さへ口遊んでゐる。(中略)そして、永遠に續く汝の苦悶に神の正義を認めて、心から神を稱へるのである。

要するに、「神の正義が行はれる」事こそがエドワーズにとつて何よりの大事なのであり、そのためには親子の情愛も全く無視されるのだ。元來、キリスト教の聖典たる舊約聖書の神が、甚だ残酷な神なのであり、例へば、舊約の『申命記』に於けるエホバは、屢々、義ならざる者どもを「憐れむべからず」、我に敵對する者どもを悉く滅ぼして、斷じて「憐れみ見るべからず」と、繰り返しユダヤ人に命じてゐるのである。

さういふ舊約の神の非情がピューリタンの神の非情であり、イギリスに於けるピューリタン革命の指導者オリヴァー・クロムウェルは、自らが「神の道具」であるとの強烈な使

命感ゆゑに、敵對者に對して時に頗る殘酷にふるまひ、それを「神の正しい裁きの實現」と信じて、微塵も疑ふ事がなかつた。さういふクロムウエルをエドワーズは尊敬し、クロムウエルと同様、正義の神の「道具」たらんとする使命感を死ぬまで持ち續けたのであり、先述したやうに、一七五〇年、四十六歳の年、エドワーズはノーサンプトン教會を追放されたが、「神の正義」の實現を求める情熱は些かも衰へず、一年後、邊境のインディアン居住地ストックブリッジに移り、一介の傳道師としてインディアンの教育や宣教に携はる事となつた。

しかも、未開のインディアンを相手に説教する場合にも、エドワーズは常に事前に入念な準備を怠らず、決して手抜きはしなかつたといふ。説教するだけでなく、インディアンと親しくつき合ひ、机一つ椅子一脚を容れるだけの狭苦しい書齋にこもつて、大著『意志自由論』や『原罪論』等の執筆に精力的に取り組み、人間に對する信仰を弾劾し續けたのだが、時、あたかも、世界制覇を求める英佛二大國の抗爭の餘波がニューイングランドの僻地にもおよび、イギリス軍がストックブリッジに駐屯し、エドワーズの居宅にも兵士達が寢泊りするやうになつた。

さういふ緊張した非常事態にあつて、「神の道具」たらんとするエドワーズの使命感は

改めて燃え盛る事となる。少年時代からエドワーズは、ローマ・カソリック教會をプロテスタント教會の最大の敵と見なし、「新たなるバビロン」と呼んで激しく憎悪してゐたが、今や、宿敵カソリックの代表たるフランスが、ニューイングランドを脅かしてゐるのだ。

一七五五年、七月、當時五十二歳のエドワーズが最後の著書『原罪論』を書き始めた頃、ブラドック將軍率ゐるイギリス軍がフランスとインディアンの聯合軍に殲滅され、ブラドックも戦死する。ニューイングランド全體を危機感が覆ひ、マサチューセッツに於ても聖職者が一齊に立ち上り、フランスに對する「正義の戦争」の遂行を訴へた。エドワーズもストックブリッジの會衆に對し、今や戦ふ事こそが義務であり、我々は熱心に祈らねばならぬと同時に、神聖なる大義のために進んで武器を取らねばならないと叫んだ。それはエドワーズの一貫した信念であつた。十年前、やはり英佛兩軍の戦闘が北米大陸で起つた時、エドワーズはノーサンプトン教會の會衆にかう語つた。

神に選ばれし民が悪辣で殘虐な敵に苦しめられ脅かされる時、自らの防衛のための戦争に進んで参加し奮闘するのは、善なる行為であり、神、祖國、及び自己自身に對する義務である。

先述したごとく、エドワーズは、プロテスタントであれ、カソリックであれ、人間は全

て「頑なに悪を指向する存在」でしかないと信じてゐた。絶対者の前では如何なる人間も「罪の塊」でしかないとカルヴァンは云つたが、さういふ嚴しい宿命観はエドワーズの血肉と化してゐた。けれども、エドワーズは同時に、人間は「善なる行為」を行ふと同時に、「神、祖國、及び自己」自身に對する義務」をも忠實に果たさねばならぬと信じてゐた。人間は所詮「罪の塊」でしかないが、キリスト教徒である限りは、「神の正義」を實現すべく「神の道具」として全力を擧げる責任を斷じて免れる事は出来ない、さう信じてゐた。

さういふ假借なき宿命觀と熾烈な理想主義の兩立こそが、カルヴィニズムの包摂する最大の逆説なのであり、エドワーズは眞のカルヴィニストとして、「悪を指向する」しかない人間の宿命をどこまでも確信する一方、「悪辣で殘虐な敵」たるカソリックに激しい敵愾心を燃やす事も出來たのである。あたかも、かのクロムウエルが、自らを「罪人のかしら」と呼んで深い罪の意識に戦く一方、麾下の鐵騎兵隊の進軍を「聖者の進軍」と稱して、敵對する國王軍に容赦なく「神の正しい裁き」の鐵槌を下さうとしたやうに。

一七五八年、エドワーズは天然痘に罹り、突如、五十四歳でこの世を去る。祖父ストダードが亡くなつた時とは異り、この天才の死に世間は極めて冷淡だつたが、ハリー・スタウトの云ふやうに、エドワーズは「神との契約の民」の住ふ「救濟者の國」、ニューイン

グラランドの究極的な勝利を確信しつつ、息を引き取つたに相違ないのである。スタウトは書いてゐる。

エドワーズは誰よりも熱烈に、いかにもピューリタンの理念を、即ち、全世界が注視する丘の上の正義の町といふ理念を永續的なものたらしめる手助けをした。その理念は、二十世紀末葉の今なほ生き續けてゐる。我々アメリカ人は今もなほ、主としてピューリタンとエドワーズとによつて形成された世界に住み續けてゐるのである。

一六三〇年、ジョン・ウインスロップはマサチューセツ灣植民地を建設すべく大西洋を渡り、アーベラ號上で「キリスト教の慈愛の雛型」と題する有名な説教を行ひ、イエスが「山上の垂訓」で語つた「丘の上の町」にニューイングランドをなぞらへて、神に選ばれし民による理想社會建設の覺悟を披瀝した。爾來、「丘の上の町」は、自らが世界の道的模範たらねばならないといふアメリカ國民の理想主義的信念を象徴する言葉となつてゐるが、スタウトの云ふやうに、さういふ理想主義の傳統は現代にも「生き續けてゐる」。イラクのクウェート侵攻に激怒したジョージ・ブッシュが「正義の戦争」のための派兵を決斷し、五十萬人のアメリカ人がアラビア半島に渡つたのは、一九九一年の事である。

(月曜評論 平成八年十月)